

連載

# 刀剣の歴史と思想

第3回

酒井 利信

## 古代中国の宝剣伝説 太阿の剣

いよいよ読者諸賢とともに、「刀剣の歴史と思想」の扉を開け、これを探究する旅を始めようと思う。

日本の刀剣思想は、古代から現代にいたるまで途絶えることなく脈々とその歴史を重ね、世界に比類なき思想体系を作り上げてきた。しかし忘れてならないのが、刀剣は、日本に伝わる以前に、古代中国において既に単なる武器を超えて神聖視されていた。この思想が古代日本に大きな影響をあたえた、ということである。つまり、日本刀剣思想には前史があるということである。

思想的にどういった前提があつたのかということを、まずもつて理解する必要がある。このことが、後に日本の思想の特徴を浮き彫りにすることにもつながるはずである。

探究の旅の出発点は、やはり、そのルーツを訪ねることから始めたい。

### ▼▼呉越の剣

が戦場で主役を演じ、それとともになつて優秀な武器としての剣が多く作られた。これがいわゆる「呉越の剣」であり、「莊子」に「夫れ干越(呉越)の剣有る者は、柙(匣)にしてこれを藏して、敢えて用いむ也。宝とすることの至りなり」(呉越の

中国において刀剣を神秘化するような思想が顯著にあらわれてくるのは、春秋時代の呉越地方においてである。

この時期、この地を舞台にして、特に剣

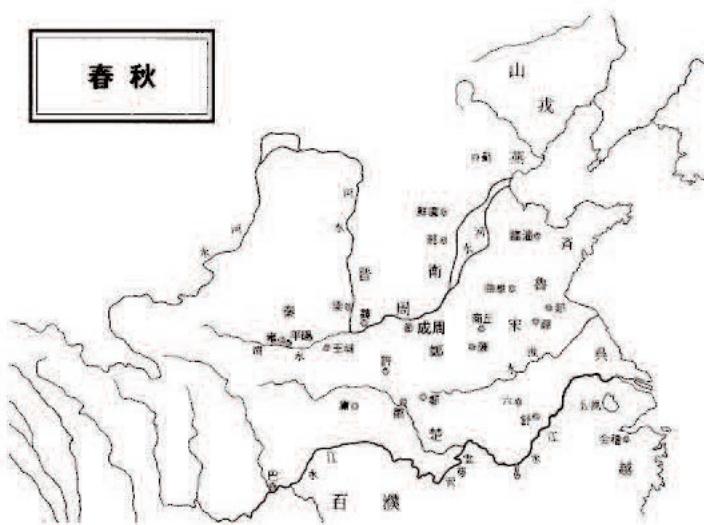
剣をもつものは、匣にいれてこれを用いず、



# 刀剣の歴史と思想

## 第3回「古代中国の宝剣伝説 太阿の剣」

〔中国歴史文化辞典〕新潮社、1998年より  
春秋時代の勢力図



宝とした)、と記されるほど重宝された。まず、これらは武器として優れていた。その後、その優秀性ゆえに、これを神秘化する思考が生じ、多くの宝剣伝説が語られるようになる。ここに刀剣思想のルーツがあると考えてよい。

中国において宝剣として語り継がれてき

ているものはいくつもあるが、有名なもの一つとして太阿たいあをあげることができる。『史記』や『晋書』など諸書に引かれる、中国を代表する名剣である。刀剣の思想と歴史を考えるオープニングにおいて、まずこの太阿に注目してみたい。

太阿は、『史記』において「陸には牛馬を断ち、水には鵠鷀ごくがんを裁り、敵に当れば堅

甲鉄幕まくを斬る」<sup>②</sup>（陸にあつては牛馬も真つ二つにし、水にあつては鵠や鷀を斬り、

敵に当れば鐵のよろいもたたき斬る）と記されている<sup>③</sup>。この剣は、まず、武器として他の追随を許さないほど優れたものと

して認識されていたと考えてよいだろう。それが神秘化されて語られていく。

吳越の剣に関する宝剣伝説は、『越絶書』や『吳越春秋』に記されているが、特に太阿については『越絶書』に重要な記述がみられる。『越絶書』は、歴史と小説の間に位置づけられるもので、後漢の袁康・吳平が著したといわれている。春秋時代の吳越の存亡から後漢にいたるまでの歴史を記し、越の国を中心記述していることから『越絶書』と名づけられたといわれる。内

容的には、史実としての信憑性しんびょうせいに疑問を抱かざるを得ない部分もあるが、太阿を語る上で欠くことのできない史料であることは確かである。この文献からは、歴史的事実を確認するというよりはむしろ、太阿に焦点をあてることにより当時の刀剣に対する思想を読み取ることに集中したいと思う。

### ▼▼太阿の伝説

いよいよ中国刀剣思想の先駆けとして、

太阿の伝説をみていく。

『越絶書』によれば、剣の鑑定士である風胡子ふうこじという人物が、楚の王の命令で吳の国に赴いて、歐冶子おうやしと干将かんじょうに鉄剣を作るよう依頼する。この二人は、「吳に干将あり、越に歐冶子あり」といわれるほど、作剣に関しては優れた技術をもつことで有名であった。当時ここには、優れた剣工が存在し、剣の鑑定士までいたということである。吳や越、そして楚といった国々において、いかに剣の文化が発達していたかがう



## 優れた剣には固有名詞がつく

かがわれる。

政治子と干将の二人は、茨山の鉄をとつて、<sup>りゅうえん</sup>龍淵・<sup>たいあ</sup>泰阿（太阿）・<sup>こうふ</sup>工夫という三振<sup>あわ</sup>の剣を完成させ、風胡子はこの三剣の出来ばえを讃えたという（テキストによつて、「太阿」と記す場合と「泰阿」とする場合がある。ここでは原典<sup>もと</sup>に忠実に「泰阿」と記しておきたい<sup>(5)</sup>）。

以後この続きを、原文の書下しを示しつつ、その内容を現代語で確認しながら追つてみたい。

晋の鄭王聞きてこれを求むるも、得ず。師を興して楚の城を囲み、三年解かず。倉には穀粟索<sup>お</sup>き、庫には兵革無し。左右の群臣・賢士、能く禁止するもの莫<sup>な</sup>し。

是に於て楚王これを聞き、泰阿の剣を引

ここに注目すべきは、王はこの宝剣をもつて、超人的に敵を斬りつくして大勝利を得たのではないということである。城楼に

晋の鄭王は、噂<sup>うわさ</sup>を聞きつけて宝剣を求めたけれども、手に入らなかつたので、軍隊をおこして楚の都城を包囲し、三年もの間撤兵しなかつた。城内の穀物蔵には食料がつきてしまい、武器庫には武器やよろいがなくなつてしまつた。楚王側近の家臣や賢士たちで、事態を開けるものは誰もいなかつた。以上のような内容である。

晋の王は、宝剣を得たいのために城攻めまで行つたということである。しかも三年も撤兵しないという執拗<sup>しつねう</sup>さであり、尋常ではない。楚王にしてみれば、食料も武器もなくなり万策尽きた絶体絶命の状態といえる。しかし事態は次のように進む。

楚王は、この泰阿（太阿）の剣をもつて起死回生の大逆転を演じたというのである。

江水折揚して、晋鄭の頭<sup>こうべ</sup>畢<sup>ごと</sup>く白し。

越王句践の剣  
(コリンヌ・ドゥベーヌ=ランクフォール著『古代中国文明』創元社、1999年より)



宝剣の威力  
or  
使用者の超能力?

## 刀剣の歴史と思想

## 第3回「古代中国の宝剣伝説 太阿の剣」

登つてこれを振つて指揮したにすぎないにもかかわらず、敵は壊滅したという、非常にマジカルな描写である。

もう一点、こういった宝剣伝説を読むにあたつて、常に頭の中をよぎるのが、こういった奇跡的な現象を引き起こしたのは、

宝剣の威力によるものなのか、それともこれを使った者のもつ超能力によるもののか

かという問題である。宝剣が力を發揮したとなれば、他の王がこれを使つても同じ結果であつたということであり、持ち主の力であれば他の剣をもつても敵は倒せたということになる。この類の宝剣伝説は他に

もあるが、この問題については、通常ストレートに文中に書かれていることはまずなく、また、行間から答えを読み込むこともなかなか難しい。しかし、ここではこの問題に明確に答える。

風胡子は、王に氣を使いながらも、はつきりと宝剣の神威によるものだと言い切つている。王が超人的な力を發揮したのではない。あくまでも宝剣のもつ神威によつて、この難局を切り抜けたということである。

この時点では、高度に神祕化され、通常の武器としての機能の範囲を遥かに超えて描かれている。そしてこの名剣の威力を、「越絶書」は「剣の威」と記述している。

楚王は、そもそも剣はただ鉄で作つたものだ。そのような鉄にもともとこのよくな神威があり得るのだろうか」と問うた。

まず、王の質問という形で、この問題に對して、非常にストレートな問い合わせ立てて

いる。これに対し風胡子が答える形で、「時、各、然らしむる有り」（時代がそれぞ

楚王は於て大いに悦び、曰く、「此剣の威なるか、寡人の力なるか」と。風胡子対えて曰く、「剣の威なるも、大王の神に因る」と。

この「越絶書」に書かれている太阿（泰阿）の宝剣伝説は実に面白い。

この「越絶書」に書かれている太阿（泰阿）の宝剣伝説は実に面白い。

こういった宝剣伝説に触れるたび、ふと

我にかえつて思うことは、なぜ單なる金属

## ▼▼剣の威の説明

楚王曰く、「夫れ剣は、鉄のみ。固より能く精神の此の若き有るか」と。

楚王は、「そもそも剣はただ鉄で作つたものだ。そのような鉄にもともとこのよくな神威があり得るのだろうか」と問うた。

まず、王の質問という形で、この問題に對して、非常にストレートな問い合わせ立てて

いる。これに対し風胡子が答える形で、「時、各、然らしむる有り」（時代がそれぞ





後漢の袁康・吳平が著したといわれている『越絶書』  
（『越絶書』四部叢刊本、商務印書館より）

夫れ玉も亦神物なり。——中略——禹穴之時、銅を以て兵を為り、以て伊闕を鑿ち、龍門を通じ、江を決して河を導き、東のかた東海に注がしむ。——中略——此の時に当たりては、鉄兵を作り、威もて三軍を服せしむ。天下これを聞き、敢えて服せざるもの莫し。此れも亦鉄兵の神なるも、大聖徳有ればなり。

この一文は、以下のような内容である。

黄帝の時代になると、美石を用いて武器を作り、伐採した樹木で宮室を造営した。そもそも美石もやはり神威の物である。禹王の時代には、銅を用いて武器を作っていた。そして銅製の工具で伊水を開鑿し、竜門に水を通わせ、長江・黄河の水を導いて、東方の東海に注ぐようにさせた。今のこの時代では、鉄を材料とする武器を作り、その威力で大軍をおどし支配下に置く。天下の人々はそのことを聞くと、服従しないでいるような勇氣のあるものは誰もいない。これもやはり、大王が聖徳を具えていることを物語るものもあるが、鉄製の武器の持つ神威にほかならない。

黄帝の時に至りては、玉を以て兵を為り、伐りし樹木を以て宮室を為り、——中略——

と明確に述べている。この一句に尽きることであるが、これではまだ分かりにくいことは確かであり、具体的に次のように補足している。

結局、石器の時代、銅器の時代、鉄器の時代という、文明が進歩していくなかで、その時代その時代の最先端文明であるからこそ神威があるという理屈である。それゆえ、石器時代にあつては美石もやはり神威があつた。現在は鉄器文明の時代であるから、何ものをも屈服させるだけの神威が、最先端文明の産物である鉄器の剣にはあるということである。

「時各然らしむる有り」（時代がそれぞれそうさせるのだ）というのには、こういった意味である。

『越絶書』は、何も難しいことは言わない。誰も斬らず、剣を振り自軍を指揮しただけで敵を壊滅させるという神秘的な描写について述べられた宝剣の神威についての説明は、いたつてシンプルであつた。あくまでも剣の武器としての実用性が優れていたことから発した神秘性であるため、こういふた説明になるのだろう。

ここには、剣を神聖視するようになる、ごく初期の観念がうかがわれる。いまだ従来の中国的な思想の関与は何もない。



刃の刀ではなく諸刃の剣であつたことも、刀剣の歴史と思想にとつては重要なことである。

〔註〕

(1) 『莊子』刻意編

(2) 『史記』蘇秦列伝

(3) 太阿の名剣は、中国のみならず日本においても知られる。例えば、近世初期

の著名な禪僧である沢庵宗彭は、その著

『太阿記』のなかで「太阿は天下に比類なき名剣の名なり。是の名剣は、金鉄の剛きより、玉石の堅きまで、自由に研れて天下に刃障になる物なし」(太阿は天

下に比類なき名剣の名で、これは金や鉄のようないものから、玉や石といった堅いものまで自由に切れて、天下にこの刃をはばむものはない)と記している。

(4) 『越絶書』四部叢刊本、商務印書館

(5) この剣に関して「太阿」と「泰阿」という二つの表記があり、このことをどう考えるかという問題がある。

中国には、類書といわれるものがある。類書というのは、どの書物にどういった記述がなされているかということを網羅的に扱い、これを項目別に分類し、まとめたものである。「剣」であれば、これに関する記述をその出典とともに、例え

ば「越絶書に曰く、」という形で、多く集めてまとめている。日本の『古事類苑』と似ている。『北堂書鈔』や『太平御覽』『芸文類聚』といった類書では、同じ『越絶書』から同一の文章を引用しへきしているが、この剣名についてだけ「太阿」とする場合と「泰阿」と記す場合がある。

つまり、別の剣が二つ存在するということではなく、テキストによって表記が異なるだけで、同一の剣を指すと考えてよい。

一般的には「太阿」とすることが多いようである。

1/3広告

